元気っ子　Ｎｏ294 ながさわ保育園

園　長　　中　瀬　弦　偉

１月の生活発表会について、保護者の皆様のご協力を頂きましたおかげで何とか無事に終えることができました。本当にありがとうございました。生活発表会のお話は澤井が「副主任コラム」で書いていますのでそちらをご覧下さい。

今年の１月に経団連の新年会が２年ぶりに開催されました。そこで各企業トップが 2022 年の景気や日本経済の見通しについて、様々な意見交換をされていたのですが、その中のある企業トップがこんな見通しを持って話をされていました。

「景気の良くなる会社と悪くなる会社の差は大きくなると思う。新型コロナウイルスの感染拡大がおさまり、以前のように元に戻ることをただ待っている会社にとっては厳しくなると思う。コロナ禍での変化に対応できるかどうかで企業業績の回復スピードに差が出てくる。」

このような認識をもった企業がいくつかありました。これは保育の世界においても同じことがいえると思います。当然、保育とは人類の普遍的な営みですので、経済のような景気といった数字で測れるものではありませんが、コロナ禍において、園の伝統といった過去から継続されているものに対する意味の確認、見直し、またコロナ禍、アフターコロナ時代への予測とそこに対する対応の確認、見直しなどが保育の世界には求められると思います。そのためには与えられる情報だけでは不十分で、自分から能動的に情報を収集していき、世界の保育をはじめ、様々なことに対して俯瞰的、そして相対的な視点で見通しをもち、必要とされるアップデートを行っていく必要があるでしょう。

また、リカレント教育といった学び直しも大切にしなくてはならないでしょう。例えば「赤ちゃんの白紙論」については脳科学の研究が進むにつれてこの考え方が否定され、シナプスという神経細胞とその刈り込みによって赤ちゃんは成長していくということが分かってきました。しかし未だに保育の世界でも白紙論を信じている人が少なからずいるそうです。その他にも「保育所保育指針」については昭和 40 年に制定された後、平成 2 年からは約 10 年ごとに改訂がなされています。また国連に採択され国際条約として発効している「子どもの権利条約」についても日本は 1994 年に批准していますので、これらの研究や解説については保育に携わる者ならば熟読しておく必要があるでしょうし、このように広い視野の中での学びによって保育の質は向上していくのだと思います。

現在、コロナ禍というまさに VUCA の時代の入り口に立たされている人類にとって、レジリエンスを試されている状況にあります。この難局をいかに乗り切っていくかは、人と人とがいかに協力できるかにかかっているように思います。今こそ大人の「非認知能力」の見せどころなのではないか、そんな風に思います。今年度もあと２ヶ月、皆様最後までどうぞよろしくお願い致します。